

死（＝生）に向き合う人と係わり合う者の任務の一つ...

在宅ホスピスケアのケアマネ - ジャ - の講演を聴く機会を得た。まだ数少ない在宅ホスピスケアだけに、理念、定義、施設紹介、スタッフ配置状況、事例、利用状況、ケア手順、医療・福祉制度の活用状況、課題、等々、細部まで紹介いただき、在宅ホスピスケア理解に大変参考になった。

ついつい斜めからものを見るいつもの私の悪い癖かなと反省しつつも、以下のようなことが気になった。

スライドの中に、「人間としての尊厳を保ちながら」、「人生を全うすること」、「全人的なケアである」、「できる限りの可能な最高のQOLを実現すること」、「死に逝く人とともに歩む」等の言葉が目についた。こうした言葉の中身の重要さは、末期がんの方に限らず、人間の普遍的な永遠の課題と思う。それだけに、がんは時に命も奪う病ですが、そうした方々の生き様を通して、こうした言葉の中身を人は学ぶことも多くあると思う。

「その中身はこうだ！」という絶対的なものはない（あってはならない）が、先人の生き方（智慧）は、自分の、また、次世代の生き方の参考になると思う。

また、講演会にはたくさんの若い看護師が来ていたが、職業人としても、患者一人一人異なるこうした言葉の中身を、あれこれ具体的な、また、事例的な観点を多く持っていた方が、ある患者の具体的ケアを考え易いのでないかと思った（そうでないと、自分の理解とその患者も同じと錯覚し、実際のケアにすれ違いが生じる）。

つまり、限られた講演時間内でこうしたことにも詳細に触れるのも無理であろうが、せめて「私の経験からは、こうした観方、こうした考え方もありますよ。みなさんもこれら言葉の中身を常にまず自問自答することが、その患者の最高のケアに繋がりますからね。」のような一言でも触れて欲しかったということである。特に、死（＝生）と向き合ってる方々に関係する話には、ここは避けられない側面と思う。

更に、こうした方々に接する職業人等は、患者に代わりそれらを発信することも一つの任務と思うが...。正にこうしたことが、「死に逝く人とともに歩む」ことの一つではないだろうか。

私は緩和ケアを少しお手伝いさせていただいているが、こうした状況の方々からメッセージを受け取り、少しでもメッセージ発信のお手伝いもできればと思っている。

（2004年03月07日記）